

調査・検討課題に対する議論の整理(案)

1. 国内外の動向

【調査・検討課題】

国内外における計算科学技術に係る状況、利用や技術の動向はどのようになっているか

【ポイント】

- (1) スーパーコンピュータの活用が、科学技術面・経済面で国の将来に影響を及ぼすという認識が定着し、国際的にスーパーコンピュータの導入・開発がこれまで以上に積極的に進められているのではないか。

導入のグローバル化(TOP500 リストは 2011 年 6 月の 28 か国から 2012 年 6 月の 30 か国、1 ペタ FLOPS 以上のマシンは、4 か国から 7 か国へ)

自主開発の拡大(中国ではプロセッサまで自主開発、フランス Bull 社はフランス原子力庁に TERA-100 を納入、ロシアでは T - Platforms 社がモスクワ州立大学に Lomonosov を納入、インドでも SAGA - 220 を開発、など)

米国や欧州などのエクサスケールを目指した動き(米国: 政府として DOE を中心にエクサフロップスをサポート、欧州: EESI(European Exascale Software Initiative)から EESI2 への移行と FP7(The Seventh Framework Programme)による MontBlanc、DEEP、CRESTA の3つのプロジェクト)

米国や韓国では、国家的投資によるスーパーコンピューティングの強化を図るため HPC 法を制定(米国: High Performance Computing Act、韓国: National Supercomputing Promotion Act)

- (2) 国内においては、「京」の整備や革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ(HPCI)の構築が進み、また、国内の総計算資源は本年6月に完成する「京」も含め、20 ペタ FLOPS 超と推測されるなど、計算環境の整備が世界上位の水準に戻りつつあるのではないか。(今後のニーズについて、調査の結果等を踏まえ追加)

(文部科学省関係機関の総計算資源)

国公立大学合計 6,272 テラ FLOPS(平成 23 年 5 月現在、うち基盤センター(計 5,590 テラ FLOPS)は平成 24 年 5 月現在)

大学共同利用機関法人、及び文部科学省関係の独法等 3,007 テラ FLOPS(平成 24 年 5 月現在)

平成 24 年 7 月以降「京」(11.28 ペタ FLOPS)が追加

(文部科学省以外の機関)

2012 年 6 月の TOP500 においては、上記機関の他、研究機関として 1,701 テラ FLOPS、民間 1,659 テラ FLOPS、合計 3,360 テラ FLOPS

(国産マシンについて)

2012 年 6 月の TOP500 においては、国内設置の 22,090 テラ FLOPS のうち国産マシンは 16,527 テラ FLOPS(「京」を含む)

(3)また、2. で述べるように、幅広い科学技術の分野でスーパーコンピュータは研究の発展に不可欠なものになってきているとともに、産業界でもスーパーコンピュータの利用が普及しつつあり、今後、その重要性は高まっていくのではないかと。

(4)一方で、「京」及び HPCI で画期的な成果を創出し、その社会への還元が求められるとともに、今後の計算科学技術の推進にあたって、いくつかの課題が明らかになっており、これらの課題に適切に取り組んでいくことが必要ではないかと。

消費電力等の制約条件の中で各 HPCI システムの性能向上
システムの超並列化に対応した耐故障性の向上、システムソフトウェアやアプリケーションの開発等

(5)また、スーパーコンピュータを巡る技術面・利用面で新しい動きが出てきており、これらの動きにも適切に対応していくことが必要ではないかと。

(技術面)

コンピュータ関係企業を中心プレーヤの変化(IBM、Cray、SGI のようなシステムベンダから、Intel、NVIDIA、ARM などのプロセッサベンダへの変化)

スピン・アウトからスピン・インへ(大型計算機の技術をコモディティに活かすスピン・アウトから、市場の大きなコモディティの技術をスパコン

の技術に活用するスピン・インへの流れ)

研究開発のグローバル化(欧州におけるエクサスケールに向けた国際連携。IESP(International Exa-scale Software Project)による米国、欧州、日本、中国の国際連携。ハードウェア、システムソフトウェアの共同開発への期待。)

新しいシステム開発におけるハードウェアの研究者とアプリケーションの研究者の共同(Co-design)の重要性の高まり

国内資本による半導体製造については、最先端プロセスでの量産がほぼ不可能な状況であり、プロセスと一体となった設計についても極めて困難になりつつある。

(利用面)

大規模で多種多様なデータの効率的な処理・分析など、いわゆるビッグデータへの対応

ストレージとHPCIを組み合わせたビジネスの台頭(Google や Amazon、Microsoft など)

自然科学以外の分野での利用(経済、金融などでのシミュレーションの利用)

PRACE など、複数のスーパーコンピュータを1つの基盤として運用(欧州各国で共同利用可能なハイエンドシステム(Tier-0)の充実など)

(6)国内のスーパーコンピュータ関係企業については、エクサスケールに向けて CPU も含め技術開発を継続する企業、高実行効率や高電力効率など使いやすさを追求する企業など、それぞれ今後の展開の方向性が異なりつつあるのではないか。

2. 計算科学技術の利用状況、今後の必要性

【調査・検討課題】

科学技術分野で計算科学技術がどのように利用されてきているか。また今後の必要性はどうか。

【ポイント】

- (1) 工学や科学が目指すもの、その中で計算科学がどのように貢献するのかを考えることも必要ではないか。

理論、実験に次ぐ「第3の科学」、予測の科学としての計算科学技術
(計算科学とはなにか)

第4期科学技術基本計画における国家存立の基盤や、科学技術の共通基盤としての計算科学技術

細分化されてきた基礎科学の分野、階層などを統合、融合できる可能性

演繹的なものだけでなく、帰納的な利用による科学技術への貢献
政策立案への貢献という視点も必要

- (2) 科学技術の分野では、実験だけではわからない、もしくは実験できないような部分を理論計算で補うという側面もあり、例えば極限環境の研究が可能になるなど、計算科学的な手法は不可欠なものとなっているのではないか。

物質科学、地震・津波、気象・気候、素粒子・宇宙、生命科学、医療・創薬分野におけるシミュレーションの利用

物質科学において、実験の補完、新しい物質設計を目指すには、より信頼性の高い方法論で計算する必要がある、膨大な計算量が必要

地震津波被害の減災のためにはシミュレーション研究が必要不可欠であり、より精緻な計算をするためには膨大な計算量が必要

研究開発における、単一モデルによるシミュレーションサイズの拡大の方向性と、複数のモデルを用いたアンサンブル計算の2つの方向性

- (3) ゲノムデータ処理に代表されるように、シミュレーションだけではなく、データ処理にスパコンが利用される側面も増えてきているのではないか。

シーケンサの発展による膨大なゲノムデータの取得(次世代シーケンサにより、ゲノムが安価に高速に得られるようになってきた)

- (4) 一方、シミュレーションの解像度をあげることにより、計算で用いるモデルを新たに検討する必要もあり、単純に解像度をあげるだけではうまくいかない場合もあるのではないか。

パラメタリゼーションと第一原理計算のバランス、新たな物理法則のモデル化

地震シミュレーションにおける高精度な地殻情報の入手など、解像度に応じた観測データの必要性

- (5) 社会的ニーズに応える実際のシステムを考えた場合には、長期的視点に立ったシステムの整備計画と、観測データの取得からデータ入力、プリ・ポスト処理を含めた全体のシステム構築が必要になっているのではないか。

システムを更新してもすぐには性能を引き出すプログラムはできないため、長期的な視点に立ったシステム整備が必要

高精細な地震・津波シミュレーションに必要な詳細な地形データ、建築物等のデータセットの整備が必要

地震・津波のサブリアルタイム処理や、リアルタイム観測データの入力予測結果の評価と、社会への発信方法についても検討が必要

「知のフロンティアとしての科学」と「社会への出口」は異なる視点での議論が必要

- (6) これまでの議論はスパコンを使っている人を想定しているが、実際にはスパコンを使ったことのない分野や研究者・技術者も多いのではないか。そのような分野にもスパコンの利用を進め、成果を創出できるようにしていく必要があるのではないか。

利用環境の整備(簡単な手順で使えるマシンや、ジョブ待ちでプログラムがなかなか実行されないなど)

サポート体制、窓口の整備など

【調査・検討課題】

自然科学以外の分野における利用の状況と今後の見通しはどうか。

【ポイント】

- (1) 自然科学以外の分野においても、計算機が必要とされる場面があり、その

利用は進んできているのではないか。

人間集団の科学的研究や、経済現象を研究するときにはスパコンが用いられている

インフルエンザの拡大予測や有効な介入政策立案のためには、シミュレーションが必要であり、スパコンによる計算が必要となる(122万人のパンデミックシミュレータなど)

金融市場のデータ、スーパーやコンビニの小売データなどは膨大であり、それを蓄積し解析するためには大きなリソースが必要となる

ビッグデータである小売データの解析をとおして、需要予測シミュレーション技術が求められている。また、ブログ上のデータを用いることにより1日ごとの景気判断ができる可能性があるが、このためには「京」を上回るスパコンが必要になるとと思われる

(2) 社会への出口と近いものが多く、自然科学分野で求められるスペックとは異なるものがあるのではないか。

金融市場のアプリケーションでは、ミリ秒オーダーでの取引に対応するためのリアルタイム性と、精度のよいリスク推定などの要求から大規模計算の両面が求められる

【調査・検討課題】

計算科学技術の産業利用の状況や、今後の必要性はどうか。

【ポイント】

(1) 産業界の利用は、より現実に近い状態での解析や、ものづくりにおける製品の設計など、大規模計算へのニーズはまだまだあるのではないか。

(2) 一方、大規模、高度解析を活用できる企業はまだ少なく、実際のものづくりではシミュレーションが十分普及しているとはいえず、その裾野をひろげていく必要があるのではないか。

解析技術、製品開発に結びつける知識の必要性(課題に対する適切な計算モデルの構築と解析結果の解釈、結果から得られた知見による改善や創造)

シミュレーションができる人材の育成、技術やノウハウの継承

使い勝手のよいソフトウェアの必要性(大学のソフトウェアでは、インタフェースにまで注力して開発することは難しい場合がある)

- (3) 産業界におけるスパコン利用の実情としては、維持費、コストなどによりトップマシンの100分の1から1000分の1規模のスパコンを利用するのが主流となっているなど、大学・研究機関と産業界ではスパコンの在り方が異なっているのではないかと。

パラメータサーベイなど(高精度で時間のかかる計算より、多くのパターンで計算したい場合がある)

大学の研究とは異なり、企業では既存の商用ソフトウェアを利用することが多いため、利用したいソフトウェアがシステムにのるかどうかが問題

長期の製品開発は共用のシステムを利用する場合もあるが、すぐに製品化に結びつくようなシミュレーションは、セキュリティ上社内のマシンで行うことになる

- (4) 業種によりスパコンの利用状況やスパコンに対する要求が異なるので、利用パターンに沿った議論が必要ではないかと。

業種による違いとともに、ユーザ企業とベンダ企業でも考え方が異なる(ユーザは安く速ければベンダにはこだわらない場合がある、また中小の企業ではハードもソフトも人材もない)

業種により、製品の企画段階から製品化までの時間が異なる(例えば材料分野や製薬などは製品化に時間を要する)

同じ企業でも、研究開発部門で必要とされる用途と、ものづくりの現場とで求めるものが異なる

3. 将来の我が国における計算科学技術システムの在り方

・リーディングマシンの定義、必要性

【調査・検討課題】

リーディングマシンの必要性についてどう考えるか。

【ポイント】

(1)リーディングマシンについては、以下の2つの要件を満たし、国の戦略的リーダーシップに基づき我が国の計算機科学及び計算科学全体を牽引するとともに、科学技術の新たな展開を切り拓いていくシステムではないか。

- ・ 世界トップレベルの高い性能をもったシステム
- ・ 最先端の技術を利用し、新たに開発されたシステム

(2)リーディングマシンは我が国の計算機科学及び計算科学を発展させ、世界における当該分野の優位性を維持し、それにより我が国の科学技術の発展や産業競争力の強化に貢献することが出来ることから、必要ではないか。

(3)リーディングマシンの範囲や性能の考え方については、更に検討が必要ではないか。

(リーディングマシンの範囲のイメージ)

[イメージ1] 我が国のフラッグシップとなるシステムであり、幅広い分野をカバーするマシン

[イメージ2] 我が国のフラッグシップとなるシステムであり、幅広い分野をカバーするマシンと、それを支える特徴的なシステムを持つ複数のマシン

[イメージ3] 各分野の課題解決に必要となる特徴的なシステムを持つ複数のマシン

(4)上記(3)に関し、リーディングマシンを幅広い分野をカバーするマシンとするか、分野ごとの特徴的なマシンとするかについて以下の意見があった。

開発費も巨額になり、これまでと同じように特定分野向けのスパコン開発は理解が得られにくい。多くの分野のユーザが利用可能なアーキテクチャを2台持つことが望ましい。

大規模計算のニーズを満たし、効率的にリーディングマシンの役割を担うためには、汎用であることが必要である。

計算資源の全体の需要としてはコモディティからの流れが大きく、ユーザがより高性能のマシンを容易に利用できるように、マシンの設置計画、開発を考える必要がある。特殊なハードウェアに特化したプログラミングでは先がない。

分野により計算アルゴリズムが異なるため、一つのアーキテクチャで全てを効率的に実行することは困難であり、リーディングマシンは汎用性の高いものになるとは限らない。

ソフトウェアを将来にわたって使えることは重要だが、性能を出すためにはある程度コードの変更が必要になる。コンピュータサイエンスの人がアーキテクチャ依存部分を自動的に生成できるようなコンパイラやフレームワークの開発をしていくことで、アプリケーションは高レベル記述のまま性能を出せるようにしていくことが必要。

複数のリーディングマシンを開発する場合であっても、予算のかけ方についてはメリハリをつけるべきではないか。

ソフトウェア開発が高度化、大規模化しているので、アプリケーションが将来にわたって使えるようにすることも、リーディングマシンの開発整備にあたり考慮する必要があるのではないか。

・我が国における計算科学技術システムの総論について

【調査・検討課題】

汎用システム・専用システムを含め、どのようなシステムを整備・運用すべきか。

スパコンの運用に関し、大学基盤センター、附置研、独法の役割はどうあるべきか。

必要な計算資源はどの程度か。また、どのような能力のスパコンをどのように配置すべきか。

【ポイント】

- (1)まず我が国の計算科学技術インフラについてグランドデザイン描き、その中で大学、附置研、共同利用機関及び独法の有するシステムの役割・位置

付けを検討すべきではないか。

(2) グランドデザインとしては、必要な予算にも留意しつつ、世界トップレベルのスパコンや、その次のレベルのスパコンを複層的に配置し、全体として世界最高水準の計算科学技術インフラを維持・強化するという考え方が重要ではないか。

(3) トップレベルのシステムについては、基盤と言うよりもサイエンスやテクノロジーを切り拓く最先端の装置という位置づけとすべきではないか。

(4) 全国共同利用をしている9大学の情報基盤センター(以下「情報基盤センター」という。)を巡る状況は設立当初と変わってきており、その役割や位置付けについて改めて検討する必要があるのではないか。

現在は、アカデミアの計算需要は情報基盤センターのみならず、附置研や共同利用機関のスパコンでも賄われており、情報基盤センターの役割は大きく変わっているのではないか

以前は、情報基盤センターにおいてプログラムの開発からシミュレーションや解析まで全てを行っていたが、今はその流れの中でどこに位置すべきかということ、それぞれのセンターが検討すべき状況になっているのではないか

現状でも情報基盤センターは学内外のユーザのニーズには応えているが、ただ計算能力が不足しているということだと考える

情報基盤センターのユーザは、大規模ジョブのみならず、小規模のジョブを動かしたい方もいるので、両方をサポートする必要がある

教育や人材育成は、大学の情報基盤センターへの期待が大きい重要な役割と考える

(5) 近年、世界のスーパーコンピュータの能力に比較して、情報基盤センターのスーパーコンピュータの能力が相対的に低くなってきているのではないか。これは、電力や設置スペースの問題に加えて、戦略の問題でもあるのではないか。

(6) 整備するシステムの性能を設定するにあたり、Linpack による性能評価を完全に無視するわけにもいかないが、より重要なのは、そのシステムで何を

達成するのかということではないか。

- (7) 専用、汎用システムについて、整備するシステムのアーキテクチャの特徴は、市場から調達するのかそれとも開発するのかということや、そのシステムがどのようなサイエンスを目的にしているかなどによって決まるものであり、一律にその良し悪しを議論することは適当ではないのではないかと。
- (8) 今後の我が国の計算科学技術システムの在り方について、一つ一つのシステムの能力を向上させるため、複数の機関が共同でシステムの導入・運用をすることも視野に入れるべきではないか。その際、これまでのやり方をベースにしたシナリオと、既存の施設も活用しつつ、いくつかのシステムを集約することにより大規模なシステムを導入していくというシナリオについてシミュレーションし、検討することが必要ではないか。

現状でも各情報基盤センターは、各センターが協調と競争をしながら、特徴のあるシステムを導入し、良い形になっているのではないかと

昨今の HPC 技術は複雑になってきており、下の世代への技術の継承という点を考えても、機関が連携して大規模なシステムを導入することは良いのではないかと

今後のビッグデータの対応を考えると、システム同士をなるべく近くに設置するということが重要ではないかと

物理的にマシンを集約して配置していくとしても、オペレーションについては様々なユーザコミュニティの意見を反映できるような柔軟なものにするべきではないかと

4. 計算科学技術に係る研究開発の方向性

【調査・検討課題】

今後の計算科学技術に係る研究開発をどのように進めていくべきか。

【議論のポイント】

我が国の計算システムの整備について、長期的なロードマップを作成し、計画的に研究開発・整備を進めていくべきとの意見についてどう考えるか

リーディングマシンの開発の在り方についてどう考えるか(位置付け、進め方)

ハードウェアとアプリケーションの研究開発を、どうバランスをとりながら進めていくか

その他留意すべき事項としてどのような点があるか

- ・ ビッグデータへの対応やリアルタイムのデータ処理
- ・ 計算科学と計算機科学の連携
- ・ 我が国で開発した技術やシステムのビジネス展開

【前回までの議論のまとめ】

(1)リーディングマシンの開発の必要性と意義についての意見

開発する力があるかぎりには開発すべきだと思う。スパコンを買ってきただけでは、それを使いこなしてすぐに成果を出すことは難しく、ハードウェア開発者と連携してソフトウェア開発をはじめないと間に合わない。

国内で開発することにより、アプリケーション開発者と計算機開発者との密接な連携によりスパコンの性能を十分に発揮できるようになる。

ソフトウェアの国際性という観点から考えると、必ずしも国内で開発したマシンだけではなく、国産以外のマシンがある程度導入されることも大切ではないか。

そのマシンで何ができるかが重要である。他のマシンで性能が出せないのであれば開発すべきであり、また、同じ性能を現状より安く実現できるならば開発すべきだと思う。開発による国際的な貢献も、我が国で開発する理由になると思う。

スパコン開発はユーザまで含めると日本の企業に大きな波及効果がある。それを回収するのは難しいかもしれないが、産業全体に大きな影響があるので、開発するべきと思う。

新たに開発することにより、市場の既存技術のトレンドでは実現不可能な計算性能を得ることが出来る。

新しい最先端の技術開発の集約により、今後のスパコンの技術トレンドを先取りしリードすることが出来る。

(2) スパコンの国内開発における投資効果についての意見

技術の下方展開などコンピュータ関連産業への波及効果を求めるのではなく、サイエンスの成果としてなにごができるかを考えるべきだと思う。

スパコン開発は、技術を引き上げる効果があり、その技術がまた民生に入ることにより技術のサイクルがまわる。その意味での投資効果の回収はあり、それが国としての長期的な視点での役割だと思う。

研究開発の方向性としては、社会に対してどのような成果を出していくかが重要である。1つの大きな科学的成果も必要だが、企業で開発された製品が社会に出ることも、全体で積算すると大きな成果になる。これらは評価基準が異なるので、多様化した見方が必要である。

リーディングマシンの国内開発にあたっては、そこでの技術開発が日本のコンピュータ産業の将来にとって有益であり、開発に要した投資をコンピュータ産業として回収できるという長期的展望が必要ではないか。

開発された技術はスパコンだけではなく、他の IT 分野にも適用されるものであり、開発されたマシンが国内はもとより国際市場でも高い競争力とシェアを持つ必要がある。

【調査・検討課題】

ハードウェア、システムソフトウェアについて、どのような要素技術に我が国として重点を置くべきか。

【議論のポイント】

スーパーコンピュータのハードウェアやシステムソフトウェアなどについて、どのような要素技術に、どのような観点から重点をおいて進めていくべきか

(観点の例)

- ・ 我が国として強みのある技術かどうか
- ・ 国家安全保障上保持すべき技術かどうか

- ・ スパコン開発でキーとなる技術かどうか
- ・ 民間に展開できる(ビジネスとして成り立つ)技術かどうか
- ・ 省エネ性に優れた技術かどうか
- ・ 技術開発にかかるコストはどうか

特に CPU などの半導体の設計・製造についてはどう考えるか

【前回までの議論のまとめ】

(1) 我が国でプロセッサの開発を行うことについての意見

長期的な観点では CPU の議論も重要であるが、現状の予算を考えたとき、いま世界と戦えるスパコンが手に入るほうがプライオリティは高いと思う。CPU にこだわりすぎると、いま持つべき装備のバランスが悪くなってしまうのではないか。

中身のわからないコンポーネントを使って大きなシステムを組むのは非常に大変であり、CPU を作れるものなら是非とも作るべきだと思う。

我が国は高性能プロセッサを開発できる数少ない国の一つであり、計算機産業や計算科学技術の一層の発展のためには、何らかのプロセッサ開発を継続すべき。それにより、システムソフトウェアの開発やネットワークの開発研究も加速される。

【調査・検討課題】

今後のアプリケーション開発の在り方についてはどう考えるか。

【議論のポイント】

今後のスパコンの技術動向も踏まえ、システム整備と並行してアプリケーションの開発も行うべきと考えるがどうか

「京」の場合はグランドチャレンジや戦略プログラムを実施してきたが、今後のアプリケーション研究開発の具体的な方策についてどう考えるか
 高度なアプリケーションを開発する人材の育成の在り方や、そうした人材と各アプリケーション分野の研究者が共同でアプリケーションを開発する体制の構築についてどう考えるか

日本発のソフトウェアの普及方策についてどう考えるか

【前回までの議論のまとめ】

(1) 今後のアプリケーションの研究開発の方策についての意見

コミュニティで共用できるような基盤的なアプリケーションソフトウェアを開発し、活用していく仕組みを作るべきである。

ユーザの裾野をひろげ、若い人がもっと自由にスパコンを使えるようになるためには、ライブラリやミドルウェアを整備するとともに、ハードウェアの研究者とコラボレーションできるような仕組みを作ることが必要だと思う。

生命科学の分野では、汎用的なアプリを開発する段階ではなく、むしろ先端的なプログラムを開発してそれぞれが新しい計算科学を推進していくという状況だと思う。プラットフォームは共通にして、その上で独自のものをつくっていくというスタイルになる。

(2) アプリケーションの開発体制、人材育成についての意見

企業秘密などの問題はあるかもしれないが、我が国でマシンを開発するのであれば、計算機科学者とアプリ側がもっと密にコンタクトしてアプリケーションを開発していくべきではないか。

我が国のソフトウェア開発は一人で職人芸的にやっている部分があるのではないか。分業体制を明確にし、組織的に開発する体制をとることが必要だと思う。

アプリケーションソフトウェアを開発する人材については、サイエンスとしての成果だけではなく、ソフトウェア開発に対する評価を考える必要がある。

(3) 我が国で開発したアプリケーションの普及方策についての意見

開発したソフトウェアの維持を個人に頼るのではなく、コミュニティでどのように維持していくか、その体制を考えるべきである。

独自のマシンで高性能がでて世界に普及させることは難しく、アプリケーション開発についても国際標準を目指すことが重要ではないか。

【調査・検討課題】

計算科学技術に関する国際協力をどのようにしていくべきか。

【議論のポイント】

システムソフトウェアについては日米の国際協力が進みつつあるが、今後の国際協力の在り方についてどう考えるか

アプリケーション分野など、システムソフトウェア以外の国際協力についてはどう考えるか

【主な意見】

日本が強い分野は日本で行い、米国が強い分野は協力して開発するべき。そのためにも自国で技術ポテンシャルを持つことは重要。

5. 利用の在り方(利用環境、産業利用促進等)

【調査・検討課題】

スパコンの利用を促進し、成果の創出を図るために、運営や利用環境の在り方はどうあるべきか。

自然科学以外の分野におけるスパコンの利用をどのように進めていくか。

【議論のポイント】

「京」及びHPCIの運用が開始されたが、その利用を促進し、成果の創出を図るために運営や利用環境に関しどのような点を改善、充実すべきか

自然科学以外の分野も含め、利用の裾野を広げるにはどのような取り組みが必要か

【前回までの議論のまとめ】

IT サービスは使いたいときに使えるのがあたりまえになっている。HPCも従来のスパコン利用の延長ではなく、使いたいときにつかえるような方向性も考えるべきではないか。

リーディングマシンの能力を最大限に発揮させるためには何らかの努力が必要になるものであり、ユーザのすそ野を広げるシステムは、リーディングマシンとは別になるのではないか。

必要なときに必要なリソースを提供する運用は難しいので、大きなリソースを必要とするマシンと、多くの人々が自由に使えるマシンとは分けて考える必要があるのではないか。

「京」の共用の枠組みは課題の選定と利用者の支援が主になっており、アウトリーチも含めて、利活用の促進をもっと図るべきではないか。

【調査・検討課題】

産業利用の促進を図るために必要なことはどのようなことか。

【議論のポイント】

産業利用促進の観点から、「京」及び HPCI の運営や利用環境についてはどのような点を改善、充実すべきか

産業界でも利用しやすいアプリケーション環境を整備するために、更に取り組むべき点としてどのようなものがあるか

【主な意見】

大学のアプリはメンテナンスが上手くできていないことや、産業界がオープンソースのアプリを使うことに抵抗感があることが、スパコンの産業利用を阻害しているのではないか。

大学の先生がやっているトップレベルの計算科学技術と産業利用との間を埋めないと、産業利用は進まないのではないか。

産業利用の裾野を広げるためには、利用する側の民間だけでなく、リソースを提供する側の民間も含め、HPC 産業のエコシステムを考える必要がある。

6. その他

【調査・検討課題】

将来を見据え、計算科学技術に関する人材育成をどのようにしていくべきか。

【議論のポイント】

人材育成の対象は、HPC 技術の研究開発をする人材(計算機科学と計算科学そのものを研究対象としている人材)、HPC 技術を利用する人材、また、産業界で求められている人材として考えればよいか。
この場合それぞれどのような課題があり、何を達成すればいいのか。

【主な意見】

分野を越えて、高度なアプリケーションが書ける人を育成する必要があるのではないか。
若い人を育てるために、数千コアを使わせる経験をさせることが必要。
また、「京」で若手のコンペをするのも有効ではないか。
人材育成の議論にあたっては、なにが達成できれば人材が育成されたことになるのか、人材育成の定義をするべき。
人材育成については、教育プログラムやカリキュラムの議論と、HPC を使いこなすための人材育成を分けて議論したほうがいいのか。

【調査・検討課題】

国民への広報や情報発信といったアウトリーチ活動をどのようにしていくべきか。

【議論のポイント】

計算科学に対する国民の理解を得るためには、どのようなアウトリーチ活動をしていくべきか。